

検証

吉田調書

④

福島第1原発事故発生翌日の2011年3月12日夜、1号機では原子炉冷却に使っていた真水が枯渇し、海水に切り替えた。だが直後、首相官邸に詰める東京電力幹部から海水注入を中断せよと電話が入る。独断で注水を継続させた吉田昌郎元所長は政府事故調査・検証委員会の聴取に「停止は毛頭考えなかった」と、きっぱり言い切った。

12日昼には海水注入の準備を指示した。

「無限大の水源は海水しかないの、淡水をいつまでもやっていても間に合わない、だから、海水を入れるしかない」と腹を決めています。

海水注入に反対意見は。

「なかったですよ」

海水で機器が使えなくなるという懸念は。

独断の海水注入継続



原子炉への注水に使われた消防車(左)＝2011年3月16日、福島第1原発(東京電力提供)

「炉はもう駄目だ」

られていた。首相に返答する前に海水注入が始まっていると知って武黒氏はあわてた。

「武黒氏から中断の根拠について説明は。」

「私は『もう入ったんだから、このまま注水を継続しますよ』と言ったら『四の五の言わずに止めろ』と。それでやっていられないなど。論理根拠もないですから」

吉田氏は独断で注水を継続する。

「私は、もうこの時点で水をなくすなんていうこと、注水を停止するなんて毛頭考えていませんでしたから。いつ再開できるんだという担保のないような指示には従えないので、私の判断でやると。ですから(緊急時対策本部の)円卓にいた連中には中止すると言いましたが、そ

の担当をしている防災班長には、ちよつと寄って行って『中止命令はするけれども絶対に中止しては駄目だ』という指示をして、それで本店には『中止した』と報告したということですが」

東電のテレビ会議映像には、担当者に歩み寄り耳打ちする吉田氏の姿が映っている。

午後7時25分、吉田氏はテレビ会議で注水中断を宣言。首相の了承が得られたとして約45分後に再開を宣言したが、この間、実際には注水は続けられていた。

注水継続の経緯を知らないマスコミ各社は11年5月に「菅首相の指示で海水注入中断」と報じ、政治問題に発展した。

「国会で何か騒いだりするものだから、大事件みたいだと思っでいらっしやる人が多いんですけど、単純に今、止めたらえらいことになるから、ずっと続けるぞと思っでやっていたわけですよ」(肩書は当時)

「全くなかったです。もう燃料が損傷している段階で、この炉はもう駄目だと、だから、あ

とは(炉を冷却して)なだめるということが最優先課題で、再だから海水注入は停止しろという指示でした」

武黒氏は、この電話の直前に菅直人首相から、海水注入で核

午後7時4分。だが約15分後、官邸にいた武黒一郎フェローが

分裂反応が再び起こる再臨界の恐れがないか確認するよう求め